

日本における6人制タッチフットボールの普及 1991-2013年

—関西女子リーグに着目して—

谷川 有 美

キーワード：6人制タッチフットボール，関西女子リーグ，アメリカンフットボール

【研究の動機】

日本における6人制タッチフットボールの歴史をたどると、その歴史はまだ浅い。しかしながら主に関東・関西地域では、マイナースポーツではあるものの、現在も男女ともに大学生・社会人を中心に行われている。そのような6人制タッチフットボールが存続するための支えとなってきたものは何か、また一方で普及させていくことができない要因は何かという点に疑問を抱き、本研究を行うに至った。

【研究の目的と意義】

競技の日本への導入過程や、大会創設・チーム発足の経緯に焦点を置き、6人制タッチフットボールの普及の経緯を解明することを本研究の目的とする。そして、タッチフットボールの更なる普及、また他のマイナースポーツ発展の一助となることを本研究の意義とする。

【先行研究と本研究の課題】

タッチフットボール受容の歴史については伊東による研究、そして戦後日本の学校教育におけるタッチフットボールの導入・削除過程については磯谷による研究があるが、どちらの論文も11人制タッチフットボール競技が検討の対象であり、6人制タッチフットボールに関する記述は見られない。また、6人制タッチフットボールに関しては、藤木が6人制タッチフットボールの戦術についての一連の研究を行っているが、6人制タッチフットボールがどのように誕生し、現在まで発展することとなったのかなど、その歴史は明らかにされていない。

以上の先行研究の検討より、本研究の課題は以下の3点を解明することとする。

1) 関西女子リーグ設立に至るまでのタッチフ

ットボールの実施状況

2) 関西において6人制タッチフットボールの基盤が形成されていった経緯

3) 基盤が形成されてから現在に至るまで展開していった経緯

本研究では関西女子リーグに着目し、これらの課題を解明していくこととする。関西女子リーグの特徴を以下に記述する。

最も特徴的なこととしては、学生王座決定戦である「プリンセスボウル」が毎年神戸の王子スタジアムで開催されており、またその大会で過去22回全て、関西が全国制覇を成し遂げているということである。そのなかでも20回は、関西勢対決の決勝戦という結果であった。このような例をはじめとし、関西は関東より競技に対する意識が高いということが伺える。

【研究の方法】

研究対象期間である1991-2013年を2期に区分する。また、6人制タッチフットボールの特性を捉えるために、1991年以前の11人制タッチフットボールが主となっていた期間も加え、以下のような時期区分に基づき実態を明らかにしていく。1) 6人制タッチフットボールが関西に導入される以前の時期（1946-1990年）、2) 協会・チーム・大会等が設立した競技の基盤形成期（1991-1995年）、3) 現在に至るまでの展開期（1996-2013年）

【結果】

1) 90年代以前の競技の実施状況について

現在も尚、11人制・6人制と異なる形が存在するタッチフットボールであるが、その発展経緯や競技対象などは、それぞれに異なっていたことがわかった。そしてその違いがそのまま、

現状の様に両種目の展開の違いに表れている。

6人制タッチフットボールは「だれでも・どこでも・いつまでも楽しめる簡易版アメフト」という、タッチフットボールの魅力をより重視しており、その結果より多くの競技者が誕生することとなったのである。

一方で、1970年代のアメリカンフットボールへの移行現象により、タッチフットボールの競技対象者が幅狭くなっていることもわかった。誰でも楽しむことができるタッチフットボールではあるが、高校生以上の男性にとっては、より魅力的に感じるのはやはりアメリカンフットボールである。他方で、タッチフットボールの利点は安全かつ手軽に楽しめるという点であるが、より高い安全性を持つ競技がフラッグフットボールである。ルールも明確であり、小学生などがフットボールを行なうにはフラッグフットボールの方が適しているといえる。このような結果から、実際タッチフットボールを行なう競技対象者が限られていると考える。

2) 基盤形成について

6人制タッチフットボールが今日に至るまで発展してきたのは、アメリカンフットボールという兄妹スポーツの存在が非常に大きかったということがわかった。基盤形成期において、タッチフットボールはアメリカンフットボール協会の恩恵を大いに受け、メジャーなスポーツ施設の試合会場としての手配や審判要員の手配など、マイナースポーツが直面する問題に悩まされることなく、JTFA 創設直後に数々の大会を行なうことができた。指導者や競技者においても、アメリカンフットボールを経験してきた熱意ある男性たちが、大学チームの指導者として、もしくは自らが競技者となって、タッチフットボール界を発展させてきた。

一方で、フットボールジャパンという大きな団体の傘下に位置付けているということは、フットボールファミリーとして、アメリカンフットボール・タッチフットボール・フラッグフットボールがある中で、タッチフットボール単体

を普及させようとする団体の活動が、あまり期待できないということでもある。

3) 展開について

6人制タッチフットボールの導入から23年経ち、チーム・競技者の増加が停滞している原因として、基盤形成当初は「女子がフットボールと名の付く競技を始めた」という物珍しさから、メディアへの露出もしばしば見られたが、展開期に至るとその機会がほとんどなくなったことが挙げられる。そのことにより、主の競技対象である女性が受動的にタッチフットボールという競技を知る機会が減り、新たな学生チームが誕生しづらい環境となったと考えられる。

【まとめ】

現在、関西女子リーグは学生5チーム、一般女子6チームの計11チームで成り立っている。学生競技者に関しては、近年卒業後の競技離れが深刻化している。2012年度卒業生計24名のうち、関西一般女子リーグに在籍する選手はわずか5名である。その主な理由としては、勤務地が地方であることや、学生時代に怪我を負い、入念なトレーニングがなければ競技継続が困難であることなどが挙げられる。一方、一般女子チームに関しては、創設年が新しい大学融合チームなどは、今後もメンバーを入れ続けることができれば、メンバー不足による解散の危機はないが、大学OGチームのうち、母体となる学生チームがなくなったチームは、存続の危機に面しているのではないだろうか。

普及活動における制限がある中で、タッチフットボールの今後より一層の普及を目指すには、各大学の熱心な普及活動による学生競技者数の増加や、競技における傷害を減少させることが欠かせない。また、現在6人制タッチフットボールは、大学からはじめるスポーツとして捉われがちだが、高校・中学と、競技の裾野を広げることができれば、よりよい発展につながると考えられる。しかしながら、これらの課題は本研究の対象外であるため、今後の課題としたい。

(指導教員：秋元忍)